

【国語科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

国語科の本質

国語科は、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する教科である。国語科は、様々な事象や対象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的とするのではなく、様々な事象をどのように言葉で捉えて理解し、どのように言葉で表現するか、という言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象とするという特質を有している。したがって、言葉に着目して言葉の働きを捉えるという国語科固有の視点を踏まえ、理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを深めることが、国語科で育成したい力である。

国語科の目標及び育みたい探究力と省察性

国語科の目標	国語で理解し表現することを通して、①創造的・論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③日常生活における人との関わりの側面から言葉に対する見方・考え方を働かせ、言語感覚を養い、自分の思いや考えを形成し深める資質・能力を育成する。
育みたい探究力	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、国語を正確に理解したり適切に表現したりするとともに、新たな考えを創造する力。
育みたい省察性	テキストに書かれている言葉や自他の発言、または問題解決の過程や結果を振り返りながら、学級や個人の問題解決について調整したり、改善したりしながら問題解決の質を高める資質・能力。

国語科における探究的な学びのイメージ

読む・課題を決める

- 読む
- 自分の課題をもつ

調べる・まとめる

- 調べたことをメモする
- 自己の考えをまとめる

表現する・交流する

- 書く、作る
- 対話で自己の考えを変容させる

振り返る

- 感想や意見を述べ合う
- 振り返る

探究力と省察性を育む指導

様々な事象をどのように言葉で捉えて理解し、どのように言葉で表現するかを育むためには、実生活の場における問題を解決すべく探究する「探究力」と自らの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。

学習者一人一人が、その単元の学習を通して探究力を育むには、学習者の興味・関心や問題意識をふまえた学習課題を設定し、その学習課題の解決を目指して学習活動を展開することができるように単元を構想する必要がある。学習課題は、①学習者の学校生活や学習生活の場において、学習課題となりうるもの②社会の求めるものや国語科の教科目標などに照らして、子どもに興味・関心をもってほしいと思うことから設定することができる。そこで、子どもが興味・関心を持つ学習材として、『ほんまもん（本物）』を積極的に活用したい。『ほんまもん』を活用することで、子どもにとっては「知りたい」「伝えたい」と言った意欲が高まり、学ぶ必然性のある学習となる。自分が選んだ作品や地域教材など身近なものを教材化することで、子どもと学習材との距離が縮まり、子どもたちがより探究的に学びたい『ほんまもんの課題』となり探究的に学ぼうとする姿が見られると考える。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記述などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、年度初めと年度末にアンケート調査を行い、アンケート結果による量的評価も行う。

【社会科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

社会科の本質

社会科は社会認識を通して、公民的資質を育成する教科である。公民的資質の育成は社会科の究極の目標であり、国際社会に生きる民主的で平和的な国家・社会の形成者として必要な資質・能力とも言える。このような資質・能力を育成するためには、広い視野から地域社会や我が国の国土に対する理解を一層深め、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きていくための基盤となる知を生み出すことや我が国の歴史や文化を大切にし、日本人としての自覚をもつようにするとともに、持続可能な社会の実現など、**よりよい社会の形成に参画する資質・能力**の基礎を培うことを重視していく必要がある。

社会科の目標及び育みたい探究力と省察性

社会科の目標	社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者としての必要な公民的資質の基礎を養う。（＝よりよい社会の形成に参画する資質・能力の育成）
育みたい探究力	社会的な見方・考え方を働かせながら、実社会に存在する課題を問題と捉え、問題解決のために様々な情報を収集し、整理分析し、仲間と共に問題解決方法を創造し、表現・発信する資質・能力。
育みたい省察性	自他の問題解決について社会的な見方・考え方を働かせながら、問題解決を見通したり、振り返ったりし、学習を調整・改善しながら問題解決の質を高める資質・能力。

社会科における探究的な学びのイメージ

【実社会の問題発見】

問題発見
解決の見通し
**社会参画への
意欲の喚起**

【社会を考察する過程】

問題解決①
問題解決に向けて、情報を収集し、整理・
分析を行う。
社会参画に向けて解決方法の追究

【社会を構想する過程】

問題解決②
問題解決に向けて、まとめ・表現・発信する。
社会参画（問題解決）

探究力と省察性を育む指導

よりよい社会の形成に参画する資質・能力を育成するためには、実社会の問題の解決に向けて社会的な見方・考え方を働かせながら問題解決を進める「探究力」と自らの問題解決を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。そのためには、教材分析と単元構成の2つが特に重要である。

まず、教材分析では、以下の6つの視点を重視している。

- 子どもたちが葛藤するような「壁」のある課題であるか。○教材のもつ価値や内容に汎用性があるか。
- 子どもの興味・関心に沿っているか。○継続的に繰り返しかかわることができるひと・もの・ことがあるか。
- 子どもたちの社会的な見方・考え方の変容につながるような事実があるか。
- 社会科で育成すべき資質・能力の育成が図れるものか。

次に、単元構成では、「社会的事象を考察する過程」と「社会的事象を構想する過程」の2つを位置付けることを重視している。

「社会的事象を考察する過程」とは、社会的事象についての情報を収集し、考察することで意味や特色、傾向などについて考察し、社会的事象についての理解を深めたり、多面的な視点で捉えたりすることを行う過程である。

「社会的事象を構想する過程」とは、問題解決に向けて、自らの社会的事象へのかかわり方や問題解決の方法を創造したりして、実際に問題解決に向けて社会に参画していく過程である。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記述などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、年度初めと年度末にアンケート調査を行い、アンケート結果による量的評価も行う。

【算数科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

算数科の本質

算数科の本質は、日常の数学的事象を既習事項や経験と照らしたり、様々な算数的活動を通して論理的思考力を高めていくことである。算数科には、確かな1つだけの解があるという特性がある。算数科は、導き出されたそれらの解が真に正しいものであるかどうかを、身に付けた知識や技能を活用し表現することで共有しあいながら論理的思考力を育むことができる教科である。また、これらは帰納的思考力・類推的な思考力・演繹的な思考力を高めることで達成できると考える。

子どもたちが、数学的な見方・考え方を働かせながら知識や技能を習得し、それらを活用して探究することで、知識は生きて働き、技能も確かなものとなる。また、より複雑な事象に対する思考・判断・表現する力も育成される。このように、数学的な見方・考え方を働かせ、学びを深めていくことで数学的に考えることや数理的な処理のよさに気づき、算数の学習を生活場面に生かそうとする態度の育成を図ることが重要である。

算数科の目標及び育みたい探究力と省察性

算数科の目標	数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して数学的に考える資質・能力を育成する。
育みたい探究力	日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見出し統合的・発展的に考察する力や、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり柔軟に表したりする力
育みたい省察性	数学のよさに気づき、算数の学習を生活や学習に活用したり、学習を振り返ってよりよく問題解決したりする態度

算数科・領域における探究的な学びのイメージ

【問題形成・把握】

○数学を活用した問題解決に向けて、構想・見通しを立てる。

- ・数学的な問題の本質を見出す。(洞察力)
- ・数学的な問題を解決するための見通しを立てる。(構想力)

【問題解決】

○焦点化した問題を解決する。

- ・目的に応じて数・式、図、表、グラフ等を活用し、処理する。
- ・論理的に推論する。(帰納・類推・演繹)

【検証・活用】

○解決過程を振り返り、得られた結果を意味付けたり、活用したりする。

- ・得られた結果を基の事象に戻してその意味を考える。
- ・様々な事象に活用する

探究力と省察性を育む指導

算数科における資質・能力(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等)を育成していくためには、形式的に知識や技能を身につけるのではなく、新しい学習場面や様々な生活場面に生かしていけるような学習過程や主体的な学習活動を構築することが重要となる。また、子どもたちが学習過程の中で、対象・自己・他者との対話を通して主体的に考えを深めたり広げたりすることで身につけた資質・能力を様々な問題場面に生かしていくことができるようになる。

算数科では、以下に重点を置き学習過程を編成し指導にあたる。①日常に内在する数学的事象を数理的に捉え数学的に表現した問題を設定し、それらを焦点化し表現・処理することで問題を解決する。また、問題解決の過程を振り返り考察する学習過程。②既習の数学的事象を、統合的・発展的に捉えた問題解決を通して比較検討することで概念を形成したり体系化したりする学習過程。

研究の評価

資質・能力について「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の3観点について、単元ごとに重点目標を設定し研究評価を行う。単元ごとに領域の系統性が子どもたちにどのように生かされたか追跡調査する。

【理科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

理科の本質

理科は自然の仕組みや自然の中に隠れている原理や法則性などを、科学の方法を用いて自分で見付けていく教科だということを観察や実験を通して気付かせるとともに、問題解決を探究する力を育成する教科である。解決しなければならない問題に遭遇したとき、客観的なデータに裏付けされた知識や技能を駆使して、真理にせまろうとする力は、急速に変化する世の中に生きる子どもにとって必要な資質・能力といえる。このような資質・能力を育成するためには、理科の見方・考え方を働かせて、自然にかかわり、問題を見出し、見通しをもって観察、実験を行い、より妥当な考えを導き出す過程を通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決することを重視した指導が必要である。

理科の目標及び育みたい探究力と省察性

理科の目標	自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付け、見通しをもって観察、実験を行うことで、問題解決の力や自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。
育みたい探究力	自然の事物・現象に親しむ中で問題を見出し、問題解決のための方法を考え、観察や実験を行い、結果を整理分析し、仲間と共に関わり合いながらより妥当な考えを創造する資質・能力。
育みたい省察性	自ら見出した問題について見通しをもって活動したり、観察や実験の方法や結果の妥当性を検証したりすることで問題解決の質を高める資質・能力。

理科における探究的な学びのイメージ

【問題発見の場】

問題発見
自然の事物・
現象と出合う。

【見通す】

予想と実験観察方法
問題解決に向けて、予
想を立て、問題解決の
方法を見出す。

【情報収集】

観察、実験
問題解決に向け
て、情報を収集
する。

【問題解決・新たな問題発見】

考察・結論・問題発見
集めた情報をもとに、問題
解決をめざす。さらに、新た
な問題を発見する。

探究力と省察性を育む指導

理科において、問題を発見し、見通しをもって問題を解決していく「探究力」と自らの探究を調整・修正しながら進めるための「省察性」を育むためには、前提・矛盾・再構成が見られる単元構成と比較する力の育成を重視した指導の2つが特に重要である。

まず、前提・矛盾・再構成が見られる単元構成とは、以下である。

- ① 子どもたちの素朴概念（既有経験）を顕在化させ、前提をもたせる。
- ② 前提が矛盾するような現象に出合わせて、問題を発見させる。
- ③ 学びを進めていく中で新たな概念を再構成させる。

以上のようなプロセスを踏ませることで、理科における探究的な学びの実現に近付かせる。

次に、比較する力を育成するために、3つの比較（対象同士の比較、他者との比較、これまでの知識や経験との比較）を行う場面を意識的に取り入れる。そうすることで問題意識をもたせたり、自己の学びを顧みさせたりすることにつながり、探究への意欲が高まったり、探究を修正することができるようになったりする。また、比較する力を育成することで、他の理科の考え方（関連付ける、条件制御する、多面的に考える）を育むことにつながる。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記述などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、単元ごとや学期ごとにアンケート調査を行い、アンケート結果による量的評価も行う。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

生活科の本質

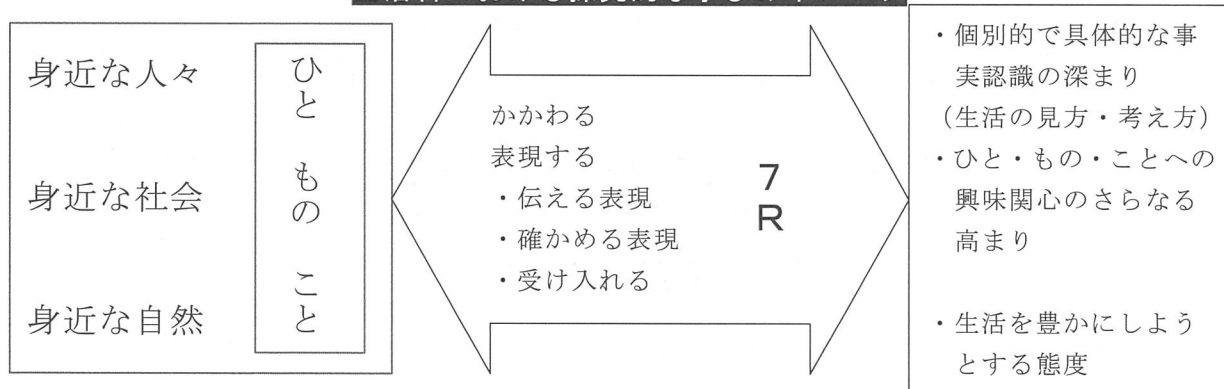
生活科は、子どもの生活の全てが学習対象である。子どもは、生活科の活動や体験の過程で自分自身や身近な人々、社会、自然の特徴やよさ、それらの関わり方などに気付く。そして、生活上必要な習慣や技能を身に付け、身近な人々や社会、自然を自分との関わりで捉える。その過程で、自分自身や自分の生活について考え、表現し、身近な人々、社会、自然に自ら働きかけ、意欲や自信を持って学んだり生活を豊かにしたりしようとする。

個別的な事実を認識し、中学年以降の教科でそれらの個別の事実認識の一般化・普遍化につながるよう、五感を通したリアルな活動・体験を進める。それらを通して、人々、社会、自然、それらに関わり、表現し、探究しようとする態度を育てる。

生活科の目標及び育みたい探究力と省察性

生活科の目標	具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための脂質・能力を育成する。
育みたい探究力	身近な人々、社会、自然（ひと・もの・こと）に関わり、表現することで、具体的な個別の対象に対する認識を深める力。
育みたい省察性	省察性の土台として、低学年期では、気付きの質を高める力。

生活科における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

7つのR 生活科の目標を達成するため、次の5点（7R）に基づいた単元構成を行う。

- (1) リアルな体験（学習と生活の結合）“Real, Raw material”
- (2) 季節を感じる（季節の遊び、旬の食材、栽培や飼育）“Real time”
- (3) 人とかかわる “Relation, Receive”
- (4) 充実した表現 “Representation”
- (5) 異質性の認識（違いに気付き、社会や世界を知る）“Respect”

五感で感じるリアルな活動を通し、ひと・もの・ことと関わり、表現することで、探究力が高まり、省察性の土台となる気付きの質を高め、生活を豊かにしようとする態度を育てる。

研究の評価

上記における（1）～（5）に基づき、子どもが表現する過程や表現したもの、対象に向かう行動、授業における言葉、「見つけたよカード」などの記録、振り返りを用いて研究評価を行う。

中学年以上の学習と、どのようにつながったかを評価する。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

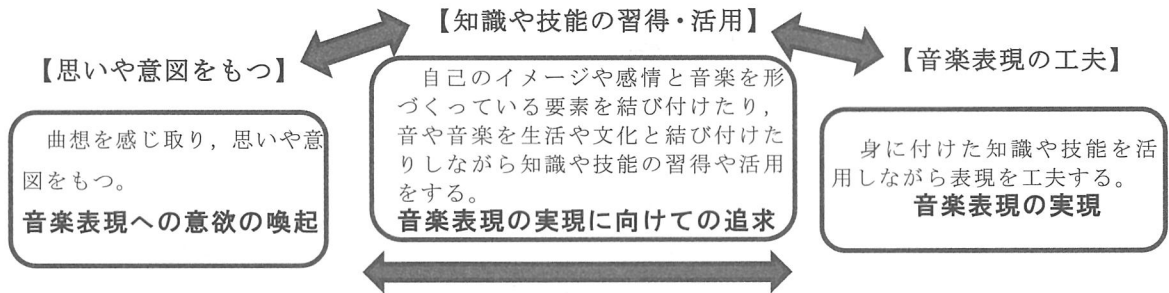
音楽科の本質

音楽科は生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する教科である。この資質・能力を育成することによって、音や音楽との関わりを自ら築き、心豊かな生活を営むことのできる人を育てる。資質・能力を育成するためには、多様な音楽を幅広く体験し、音楽に対する感性を働かせ、生活や社会の音や音楽との関わりを実感できるようにする。知識と感性を結び付けながら、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情を生活や文化と関連付けることを大切に指導していく必要がある。

音楽科の目標及び育みたい探究力と省察性

音楽科の目標	表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する。
育みたい探究力	表現に対する思いや意図をもち、そのために必要となる知識や技能を習得し、思いや意図と、知識や技能を往還させ、仲間と協働して音楽表現を工夫する資質・能力
育みたい省察性	身に付けた知識や技能を自覚したり、仲間の表現と比べながら試行錯誤して表現を創り上げたりすることで、音楽表現の質を高める資質・能力

音楽科・領域における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成するためには、創意工夫をした音楽表現をすべく探究する「探究力」と自らの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。そのために、次の3つに重点を置いて研究を進める。

- 【①しかけづくり】探究的な学びを進める中で、子ども達が課題を見つけ、自分事として課題を解決していくためのしかけづくりをする。違和感を感じたり、壁にぶつかったりするようなしかけを意図的につくって授業デザインすることで、子どもが主体となって学びに向かっていくと考える。
- 【②振り返りの充実】省察性を育むためには、自分の学びを丁寧に振り返る時間が必要となる。題材の途中や題材の終わりに学級全体や個人で振り返りをし、次の学習へと意欲をつなげ、自己変容を自覚できるようにする。「出来た（出来なかった）」「分かった（分からなかった）」等、授業を通して実感したことを発表したり、ワークシートへ記述したりすることで、自他の成長を見つめ、認め合い、自覚できるようにする。
- 【③価値付け】子ども達が、自己のイメージや感情と音楽を形づくっている要素を結び付けたり、音や音楽を生活や文化と結び付けたりする考え方を働かせることができるようになるためには、教師の価値付けが欠かせない。子どもの発言内容を教師が価値付けして共有化することで、その考え方が子ども達の中に広がり、根付いていくようにする。

研究の評価

研究内容に基づいて取り組んだ授業実践における子どもの言葉や表現する音そのものをもとに、研究の成果と課題を明らかにする。授業での子どもの言葉、ワークシートへの記述、演奏等、子どもの表現物を用いて評価を行う。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

図画工作科の本質

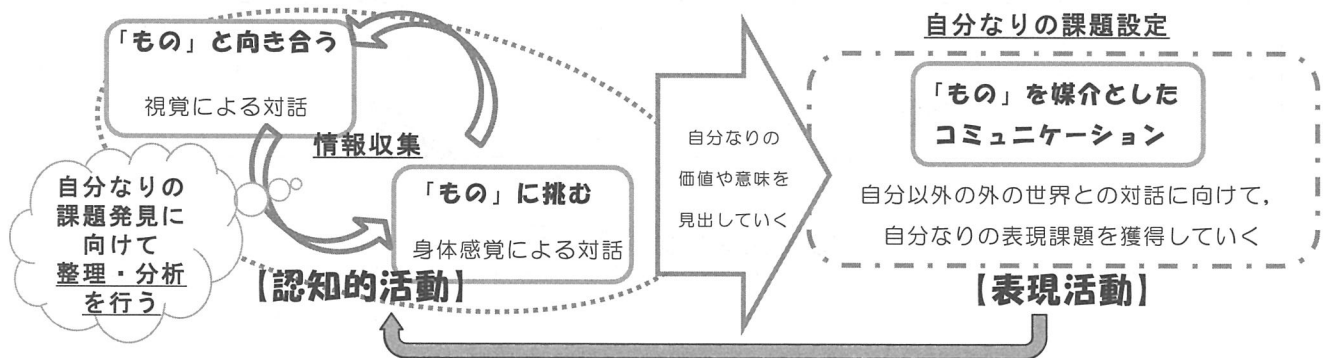
子どもは、幼い頃より感性を通して身の回りの環境と関わり、世界の認識を形成していく。図工科教育においては、取り分け、土遊びなどのような造形遊びの中では、全身の感覚を働かせた感性の教育が行われている。この造形遊びは、自発的な学びを特徴としていて、つくり出す喜びを味わうと共に、形や色を思いついたり工夫したりしながら、自分なりの表し方を見つけていく活動の中で、学びが生み出されていく。その活動の過程において、もう一度考え直したり、じっくり見直したり、周りの友達と関わったりする経験が繰り返されており、その経験の積み重ねが知識や技能となって子どもの身体に蓄積されていく。このような環境との感覚的な触れ合いを通して、自分なりの表現の課題を生み出していく中で、子どもの本来持つ造形に関する資質・能力が発揮されると共に、育っていくのである。

以上のように、図画工作科は、子どもがもつ豊かな身体感覚に支えられた感性を働かせ活動していく中で、自分にとっての意味や価値をつくり出していく資質・能力を培うことを目指している。

図画工作科の目標及び育みたい探究力と省察性

図画工作科の目標	感性を通して、環境に働きかける中で、新たな意味や価値を見出していこうとする態度を育むと共に、それらの活動の中で、発想や構想を広げながら自分なりの課題を形成する、創造性を培う。
育みたい探究力	身の回りにある「もの」に、感性的に働きかけることで豊かにイメージを膨らませたり、自分なりの意味や価値を見出したりしながら、創造的に活動していくことに喜びを見出す資質・能力。
育みたい省察性	自他の作品（制作途中を含む）の鑑賞を通して、自己が生み出したものの価値とその特質を知ると共に、他者や異文化を理解することで、コミュニケーションに向けた表現活動の創造性を高めていくための資質・能力。

図画工作科・領域における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

創造性を育成するためには、自ら意味や価値をつくり出そうとする「探究力」と、自他の探究の特質を知ると共に、行為や活動を継続したり、更新したりするための「省察性」を育む必要がある。そのためには、素材や場、空間の設定と、題材配列が、特に重要である。

素材や場、空間の設定に関しては、子どもの発達段階に応じた素材であること、創造的な活動を支えられる材料や用具を意図的に用意すること、子どもの創造性を支えられる空間であること、試行錯誤可能な素材や場の設定をすること、更に、活動の時間を十分に保証することが考えられる。

題材配列に関しては、子どもの興味関心に沿っていること、創造的な活動を支える知識・技能を適切に発揮・獲得しながら表現活動を進められること、形や色を媒介として自他との対話が繰り返されることに留意する必要がある。

研究の評価

形や色、イメージによる造形的な表現を媒介とした多様な関わり合いにおける、子どもの反応や表情、つぶやきなどの見取りや、子どもによって生み出され続けるかたち（活動過程の成果物）を、以下の観点で考察し、研究の成果と課題を明らかにしていく。

- ①題材の中で与えたものが、年齢に即している、探究的な学びを支えるものであったのか。
- ②素材や場、空間は、子どもの探究的な学びにうまく機能していたのか。
- ③題材配列や題材計画は、子どもの省察性に機能し、子どもの変容を促していたか。

また、上記の観点について、活動の結果生み出されたかたち（作品）や図工カード（言語や図による記述）などを時間軸で比較し検証していくことで、研究の質的評価を行う。

【家庭科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

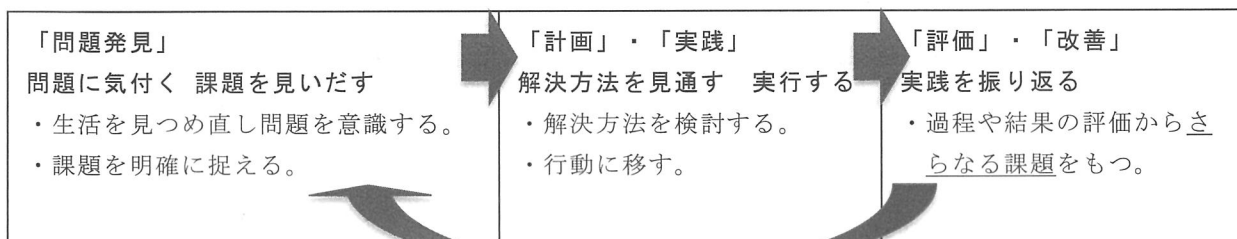
家庭科の本質

家庭科は、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成する教科である。小学校における家庭科は、家族の一員として家庭生活を自律的に営ませようとするものである。

家庭科の目標及び育みたい探究力と省察性

家庭科の目標	生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。
育みたい探究力	生活を見つめ、生活の中から課題を見出し、それを解決するための科学的な知識・技能を習得し、解決方法を立案・検討し、実践していく力。
育みたい省察性	実践した結果を評価し、振り返り、改善策を検討できる力。

家庭科における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象が学習対象である家庭科は、日常生活の中から課題を見出し、様々な解決方法を考えていく探究力と、実践を評価し交流する中で、何が良かったのか、何が足りなかったのかなどに気づき、さらなる実践へと繋げる省察性を育む必要がある。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の成果と課題を明らかにするために、学習前後にアンケートをとる。また、生活の営みに係る見方・考え方を働かせる契機となる「問い」を授業に設けることで、一人ひとりの学びの前後での変容が分かるようにする。

子どもたちが、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、そこから見出した課題を解決していったかを捉える必要がある。そのために、子どもの思考と実践を用いて評価を行う。子どもの思考は、ノートに記した言葉・授業中に発言した言葉で評価する。子どもの実践は、授業中・家庭での行動をもとに評価する。

また、体験的活動の内容に応じて、グループでの活動、ペアでの活動を取り入れ、自己評価だけでなく相互評価を取り入れる。互いに見合うことにより、自分だけでなく仲間のことでも再発見でき、そのことが自己の変容につながるからだ。また、保護者による評価も子どもの家庭での変容をみる手立てとなり得るだろう。

子どもが成長を実感し、生活への実践に意欲をもたせるための評価を積み重ねていく。

【体育科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

体育科の本質

体育科は、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する教科である。この資質・能力は、「(1)その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。(2)運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。(3)運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。」である。本校では、この3つの資質・能力を身につける＝「運動を楽しめる子」と考える。どうやって運動を楽しむのかを考え、取り組むことが探究している姿であるからである。自己やチームの能力に適した課題をもち、仲間とともに解決していく中で、運動への親しみを深めていく。課題を解決する中、技能の向上にもつながり、その満足感が他の単元でもやってみようという思いになるのである。これらが積み重ねられるよう、子どもが探究のプロセスを歩める学習過程を考えることが重要である。

体育科の目標及び育みたい探究力と省察性

体育科の目標	体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見つけ、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する。
育みたい探究力	自己やチームの能力に適した課題をもち、対象、他者、自己とかわりながら、それらの課題を解決しようと活動の仕方を選んだり工夫したりする資質・能力。
育みたい省察性	課題の解決に向けて、対象、他者、自己との対話を行いながら、自己やチームの変化に気付く資質・能力。

体育科における探究的な学びのイメージ

【課題を見つける】

問題発見
課題設定
解決の見通し

【動きを考察する】

課題解決に向けて、自分の経験や他者の活動の様子から、様々な方法を試す。

【課題を解決する】

自分に合った運動の行い方を見つける。そしてさらによりよい運動の方法を目指す。

探究力と省察性を育む指導

豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するためには、自己やチームの課題を解決すべく探究する「探究力」と、対象、他者、自己との対話を行いながら学習や行動を調整する「省察性」を育成する必要がある。そのためには、①学びの筋に沿った学習過程の工夫と、②立ち止まる手立てが重要である。①学びの筋に沿った学習過程の工夫とは、単元のゴールを見据え子どもがどんなことに問いをもつのかを考え単元を構成することである。単元途中では、思いをみとりながらその過程を修正していくことも考えられる。②立ち止まる手立てとは、対象、他者、自己との対話がより充実するように声をかけることである。活動の根拠を問うことにより、“わかってできた”ことを目指していく。また、困っている時の手立ても大切にする。活動の様子や学習カードに書かれた内容を基に個やチームに声をかけることや、場やルールの工夫をすることなどが考えられる。

研究の評価

授業実践の中での子どもの思いをもとに、一人一人の子どもが「単元の中でどのように問いをもち続けたか」に視点をあて、研究をふり返る。学習カードの内容と支援の方法を照らし合わせる、実際の活動の様子を映像でふり返るなどをして、単元における個や集団の変容をみていく。そこから、学習過程の工夫と手立てが適切であったか、子どもたちは問いをもち続けたかを判断する。また、大学との連携により、「態度測定による体育授業診断法」を用い、量的分析も行き、質的分析と両面で進めていく。

【道徳科提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

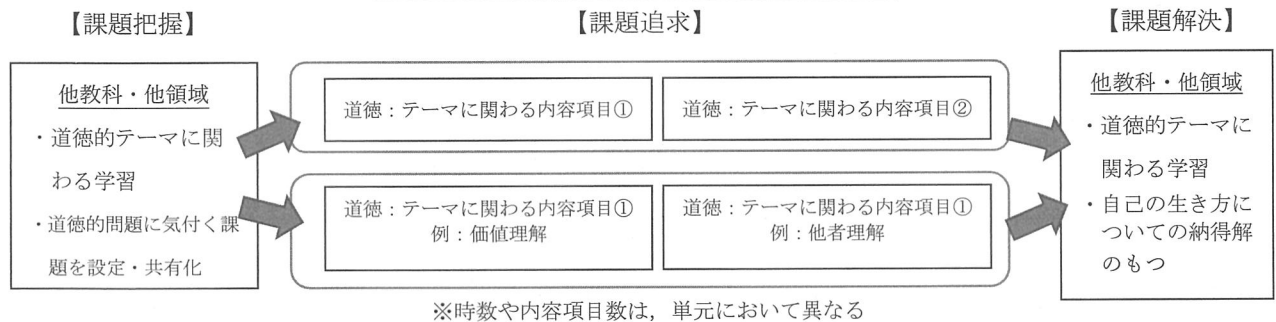
道徳科の本質

道徳科は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間としての他者と共によりよく生きることができるための基盤となる道徳性を養う教科である。子どもがよりよい生き方を実現していきたいという思いや願いを持ち、将来様々な場面に出会った時、その状況に応じて主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うことができる内面的資質を育てることが大切である。そのために、自分との関わりで考えること、多面的・多角的に考えることを道徳科の授業の中で大事にしていく。

道徳科の目標及び育みたい探究力と省察性

道徳科の目標	よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。
育みたい探究力	自分と友達の感じ方や考え方を比べながら自己のよりよい生き方について追求する資質・能力。
育みたい省察性	自らの道徳的価値理解について再度問い直し、自己のよりよい生き方について考えを深める資質・能力。

道徳科における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

よりよく生きるための基礎となる道徳性を育成するためには、よりよい自己の生き方について探究する「探究力」と自ら探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。

【探究力を育むために】

他教科他領域と関連した単元を構成し、単元に関わる道徳的問題に気づき、課題を設定・共有化することは、ねらいとする道徳的価値を一人一人が自分の問題として捉え、自己のよりよい生き方について追求しようとする「探究力」につながる。また、一つの道徳的テーマについて、複数の内容項目複数時間扱いや同一内容項目複数時間扱い等、単元形式による道徳科授業にすることにより、多面的・多角的に考えようとしたり、道徳的価値に関わる考え方を深めたりすることで、問題場面に出合った時は、様々な道徳的価値を基に考え、その状況にふさわしい答えを導き出すことができる。

【省察性を育むために】

道徳科の1時間毎と単元の途中での定期的なふりかえりを行う時間を設ける。道徳科の授業では、「今のわたしはどうだろう…」「これから…」等、これまでの自分とこれからの自己のよりよい生き方について考えることができるようにする。単元の終末では、学習課題にこれからの自己の生き方について自分なりの納得解がもてるようにする。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

外国語活動の本質

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する教科・領域である。外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することであると考えられる。

外国語活動の目標及び育みたい探究力と省察性

外国語活動の目標	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎を養う。
育みたい探究力	外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築する資質・能力。
育みたい省察性	習得した知識関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見いだして解決策を考えたり、身に付けた思考力を発揮させたりする資質・能力。

外国語活動における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

外国語活動における「探究力」とは、いかに他者とコミュニケーションを図り、新しい出会いや自国との文化の違いを楽しみ世界を広げることである。そのために今の自分に必要な情報や技能について考え、語彙や表現を習得していく省察性が必要になる。その「探究力」と「省察性」を高め、継続していくには自分が新しく習得した言語によるコミュニケーションによって新しい自分や世界が広がったことに対する喜びが感じられる指導が重要になる。

研究の評価

主として子どもたちの成果物や児童観察、アンケート調査を行い、研究の成果と課題を明らかにする。子どもたちの成果物をファイリングし、ICT機器を用いて活動や表現を記録したものをポートフォリオとして活用し、学習前と学習後の語彙の量や表現の変化をもって評価を行う。

【CHANGE 提案】

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

CHANGE の本質

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。そのために、探究的な学習の課題の過程において、課題解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解する。実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。探究的な学習に主体的に・協働的に取り組むとともに互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

CHANGE の目標及び育みたい探究力と省察性

CHANGE の目標	探究的な見方・考え方を働かせ、体験的な学びを活かした横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。
育みたい探究力	実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、仲間と共に問題解決方法を創造し、表現・発信する資質・能力。
育みたい省察性	体験的な学びを活かした自他の問題解決の過程や結果をふり振り返りながら、自他の問題解決について、調整したり改善したりしながら問題解決をすることで自己の生き方を考えていく資質・能力。

CHANGE における探究的な学びのイメージ

【実社会・実生活の問題発見】

問題発見
解決への見通し
学ぶ意義や目的の明確化する。

【体験を活かした解決方法の追究】

問題解決①
問題解決に向けて、体験したり、調査したりしながら情報を収集し、整理分析を行う。

【問題解決】

問題解決②
問題解決に向けて、まとめ・表現・発信する。

探究力と省察性を育む指導

自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するためには、実社会・実生活の問題を解決すべく探究する「探究力」と自らの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育む必要がある。そのためには、教材分析と単元構成の2つが特に重要である。まず、教材分析では、以下の6つの視点を重視している。①子どもたちが実際に体験したり調査したりして対象に働きかけることのできる課題であるか。②他教科と関連することができ、教材のもつ価値や内容に汎用性があるか。③子どもの興味・関心に沿っているか。④継続的に繰り返しかかわることができる「ひと・もの・こと」があるか。⑤子どもたちの探究的な見方・考え方の変容につながるような事実があるか。⑥自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することができるのか。次に、単元構成では「体験を活かした解決方法の追究」と「問題解決」の2つを位置付けることを重視している。「体験を活かした解決方法の追究」とは、問題解決に向けて体験したり調査したりして試行錯誤しながら対象に働きかけ、対象に思いを膨らませていく。その中で、情報を収集し、考察することで意味や特色、傾向などについて考察し、多面的な視点で捉えたりすることを行う過程である。「問題解決」とは、実際に問題解決に向けて取り組むことで自ら社会に関わり参画しようとする意志、社会を創造する主体としての自覚などを高め、非認知的能力が子どもの中に醸成されていく過程である。

研究の評価

研究内容で取り組んだ授業実践の中での子どもの言葉をもとに、研究の成果と課題を明らかにしていく。その際に授業での子どもの言葉やノートの記述などの子どもの表現物を用いて研究の質的評価を行う。また、年度初めと年度末にアンケート調査を行い、アンケート結果による量的評価も行う。

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

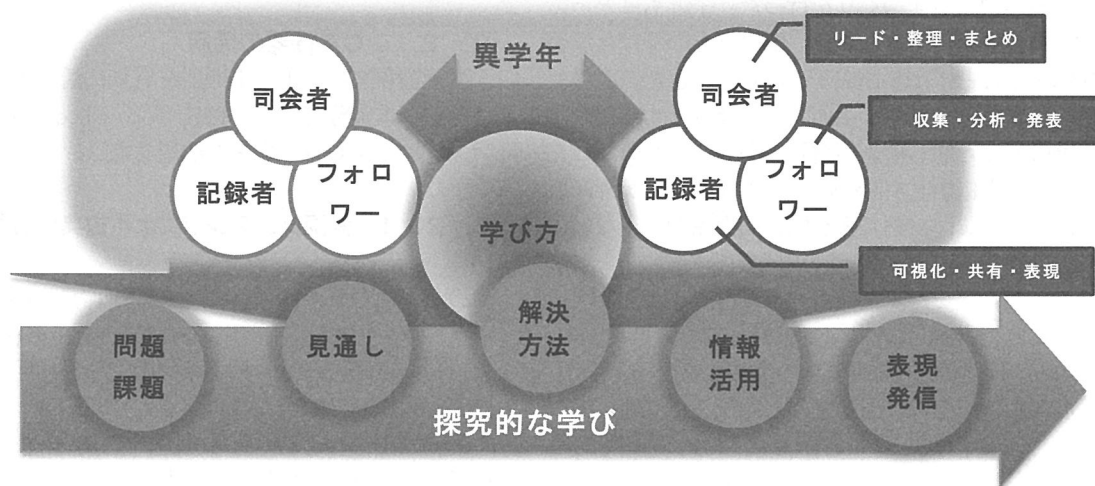
複式教育の本質

複式学級には、異学年が1つの教室で同時に学んでいるという特徴がある。異学年が互いの考えを認め合い、刺激し合うことで学びを深めることができる。しかし、1人の教師が異学年を同時に指導するため、子どもたちだけで学びを進める間接指導の時間が生まれる。この間接指導時において、司会者・記録者・フォロワーが、自分の役割を果たして学びを深めることが求められる。学び方を身に付け、異学年の関わりを大切に、主体的に学びを進める子どもを育てることが複式教育の核となる。そこには、少人数のよさを生かした他者との深い関わりがある。

複式教育の目標及び育みたい探究力と省察性

複式教育の目標	司会者・記録者・フォロワーがそれぞれの役割を果たして学びを進める中で、自学自習の経験を通して自ら学び、自ら考える主体的な態度を育成する。異学年が、問題解決に向けて協働して学び合い、問題に応じた最適な解決方法を探り出していく力を養う。また、個に応じた基礎・基本の確実な定着を図る。
育みたい探究力	見通しをもち、問題解決のために最適な学び方を選択する。様々な情報を収集・整理・分析し、仲間と共に問題解決の方法を創造し、表現・発信する。
育みたい省察性	自他の問題解決の過程や結果を振り返り、問題解決の方法を調整したり、改善したりする中で問題解決の質を高める。

複式教育における探究的な学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

最適な問題解決の方法を他者と協働しながら見出す力を育成するためには、自分たちで問題解決するための「探究力」と、自分たちの探究を調整・改善しながら進めるための「省察性」を育みたい。そのため、教材分析と学び方の2つに重点を置く。

●教材分析

- 子どもが葛藤するような課題設定。
- 子どもが学ぶ意義を感じ、見通しをもって学べる教材。
- 子どもの興味・関心に沿った課題や教材。
- 実社会や自分の生活と関連させて考えることができる内容。
- 汎用的な資質・能力の育成が図れる授業づくり。

●学び方

- 問題から課題を設定し、取り組む内容や方向性を明確にする。
- 個人や全体での考えを共有し、多様な考えを比較しながらよさを見出す。
- 問題に対するまとめを行うとともに、学び方の振り返りを行う。
- 異学年の考えや意見を大切にして学び合う。

研究の評価

授業記録から、司会・記録・フォロワーや異学年の関わり方について子どもの言葉から質的評価を行うと同時に、探究のプロセスが形成されているかを評価する。